



# ヴァン・ゴッホの 失恋モノローグ

角間貴生

## ヴァン・ゴッホの失恋モノローグ

---

ぼくはヴァン・ゴッホです。

今ではぼくの絵は天文学的な値段で売り買いされるのだそうですね。

ヘンですね。

だいたい、ぼくは生前中、ただ一点売れただけなのですよ。

その風景画だって画商の弟テオの力で、知り合いの方にやっと買ってもらっただけなのですから…

実は、ぼくは絵が上手いなんて思ったことは一度もなかったのです。

何をしてもダメで、結局は絵をやるしかなかったから、絵描きになったようなものです。

はっきり言って下手くそでした。ひたすら下手くそだったのです。

だから逆に、死に物狂いに描きなぐり、絵筆を引きずり回し、

色をぐいぐいと塗り込めたのかも知れませんが…ね。

ところで、生前は本当にみなさまにご迷惑のかけ通しの人生でした。

いま思い出しても恥ずかしい限りの人生でした。

でも、これだけはみなさんに分かってほしいのです。

ぼくはいつも頭の中では人々の役に立ちたい…と真剣でした。

いや、真剣に生き過ぎたのかも知れません。

あの頃は、純粹って良いことのように考えていたけれど、

今振り返ってみると、ただ純粹で生真面目であることは、時には良いことでないのかもしれないね。

今はそんな風に考えるぼくなのです。

だいたい、ぼくは周りの人たちとの距離を測れない人間なようです。

理屈っぽく自己中心で、しかも繊細で癪癪持ち…

おまけに女性にやたら惚れっぽくて、不器用ときているのですから…

あの頃、ぼくは周囲の人たちにいつも大変な迷惑をかけていたのでしょうね。

まあ、これからゆっくりぼくの青春回顧譚を聞いてください。

特に若い時のぼくときたら最悪でした。

そんな若い時の話から始めましょう。

16歳の時には、叔父のフィンセントのおかげでグーピル商会という画廊で働き始めたのです。

当初はぼくの真面目さが認められて、ロンドン支店まで栄転出来たのです。

ただ、ぼくはここで最初の女性問題を起こしてしまったのです。

ロンドンの下宿先で、未亡人の娘ウージェニーに一目惚れ…彼女に夢中になってしまったのです。

あの頃、ぼくは彼女を見るだけで何と幸せな気持ちになれたことでしょう。

会っている時の夢心地ときたら…ぼくは本当に幸せそのものでした。

ぼくは彼女との永遠の愛の生活を夢見たのです。

ぼくは夢中でした。

あまりに真剣だったのです。

だから、思いのありったけを彼女にぶつけて求婚しました。

そうしたら、彼女は何と言ったと思います？

「もう婚約していますから…」だって。

許せない。絶対に許せない…

それからのぼくはあまりの怒りと悲しみで、気が狂ったようになってしまったのです。今振り返ってみると、ぼくの求婚そのものがあまりに性急だったのかも知れませんがね。この時の絶望はその後のぼくの人生そのものを変えてしまったようです。ぼくは仕事も何もまったくやる気がなくなったのです。生きることの意味すべてがなくなったように思えたのです。ひとり、ただ鬱々と日々を過ごすだけのぼくに変わってしまったのでした。そんな訳で、あまりの仕事の悪さに、ぼくはパリに転勤させられてしまいました。だけど、パリ支店に移った後はさらにひどく、すぐにお客さんたちとケンカしてしまう始末だったのです。お客さんにへ理屈を並び立て「あんたは絵が分からないねえ」なんてずけずけ言うものだから…お客だってたまったものじゃないでしょうね。案の定、すぐにぼくはクビでした。その後は親父や家族の紹介で、寄宿学校の先生をしたり、書店の店員もやりましたが、どれも長くは続きませんでした。決まって、たちまち解雇でした。考えてみれば、ぼくは気が小さいのにプライドばかり強くて、いつも周りの人たちに迷惑ばかりかける人間だったのでしょうか。ぼくが心機一転、父のアドバイスで牧師になろうとした時は、これは天職だと実感しましたよ。何しろ、父さんも牧師だったし、子供の頃からぼくはずっと宗教的な雰囲気包まれて育ちましたからね。無給だったけれど、炭坑町ポリュナーージュで牧師を始めた時のぼくは燃えていました。炭鉱マンたちの貧しく荒れた生活を、何とか信仰の力で救おうと一生懸命でした。彼らの生活の中に飛び込もうと、ぼくも同じように擦り切れた汚い衣服で伝道に努めたのですよ。でも、それがかえって災いでした。鉱夫たちからは胡散臭がられ、教会からは「われわれの権威を失墜しかねない。とんでもない奴だ。」と…ここもあえなくクビでした。画商もダメ、教師もダメ、店員もダメ、牧師もダメ、何もかもダメなぼくは果たして人々のためになるようなことができるのでしょうか。人々の幸せのために尽くす、そんな仕事をするのがぼくの夢なのに…だから、ぼくがミレーの絵と生活というものを知った時、人生の目標が見えたように思ったのでした。子どもの頃から好きだった絵がやっと人々の役に立つと思えたのでした。信仰に満ちた農作業の日々を絵の中に再現することができる…そして芸術の力で貧しい農民たちの生活を幸せなものに導くことができる…これこそぼくの天命に思えたのでした。やがて、ミレーのような芸術を、ミレーのような生活を目指して、ぼくは大量のデッサンを始めたのです。その時に出会ったハーグ派（オランダの写実絵画グループ）のアントン・モーヴはぼくに一生懸命その絵画技法を教えてくれたのでした。きっと、彼はぼくにとても期待していたのでしょね。ところが、またしても女性問題です。何しろ、ぼくは子連れの子守婆と暮らし始めたものですから…当初、ぼくはあの汚れたどん底の暮らしからシーンを何としてでも救ってやりたいと真剣でした。そんな同情・憐憫がやがて愛に変わり、ぼくはシーンから離れられなくなったのです。こんな思いはただの常識人モーヴには分かるはずもないことでした。ぼくの女が子守婆と知った、あの時のモーヴときたら…

あいつは手のひらを返したように冷淡そのものに変身しました。

どうせ、あんなフツの俗物に分かるはずもないことなのだけれど…

ぼくとシーンとの間に子供も出来たので、大変なことになりました。

結局、ぼくはシーンたちとの生活を捨てることになったのです。

よりによって、ぼくが「俗物」と称する大人たちの手助けで…

ぼくは彼女たちを酷いやり方で捨てたのです。

駅のホームで彼女と子供らを置き去りに、列車に乗り込んだぼくは泣きました。

声をあげて泣きじゃくりました。

実は、あの時の風景はぼくの心の奥底に罪悪感として、何時までも付きまとうことになったのです。

ぼくはいつもこうなのです。

いつも周りの人々を幸せにしようと夢見ながら…

結局はぼくのわがままで、逆に不幸や悲しみの種を作り出しているだけなのですよ。

やがて、堪りかねた両親に引き取られるような形で、彼らの住むニューネンの牧師館で居候することとなりました。

それからのぼくは画家修業に励みました。

人間嫌いになってしまったぼくは、この農村と言っても良い小さな町で、

畑仕事する人や機（はた）を織る女性や身近な建物をひたすら日々写生しました。

この頃になってようやくぼくの両親も、この子は画家になるしかないと思うようになったのです。

また、弟のテオがぼくに期待して、毎月、決まったときに仕送りをしてくれるようになっていました。

ぼくが絵に打ち込む環境がようやく整いつつありました。

ところが…です。

またしても…パラサイトでしかないぼくが女に惚れたのです。

この町で、写生の合間に近所の娘と声を交わしているうち、ぼくらは愛し合うこととなってしまいました。

しかし、三十歳にもなって何の生業もせず、昼間から小さな町の中をブラブラしているぼくは、

町の人たちには異様な危険人物以外の何者でもなかったのです。

二人の噂を聞きつけた先方の両親はもちろん大反対。

しかも、このことで彼女が服毒自殺未遂を起こしたものですから、町じゅう大変な騒ぎになってしまいました。

やがて町では、若い女性たちにあのヘンな男には絶対に近づかないように…

とのお触れまで出る事態となったのです。

当然、宗教者である父は烈火のごとく怒り、ぼくはまたしてもここから追い出されることになったのです。

こうしてみると、ぼくはいつも純粋な愛ばかり夢見ていたような気がします。

そしていつも裏切られ、女性たちからも社会からも突き放されるようになっていきました。

ぼくが夢見る純粋な愛なんてどこにもないのかもしれない。

ぼくは恋愛をあきらめました。

そしてその時…ぼくの青春は終わったような気がしました。

ぼくはもう絵を描いて生きるしかなくなっていたのです。

ぼくはすべてを捨てて絵の世界だけにのめり込んで行きました。

ただひたすら狂ったように描き始めたのです。

新たな青春の始まりでした。

いや実は、これこそがぼくらしい本当の青春だったのかも知れません。

これ以降のことは、みなさんも色々にご存じかもしれません。

ぼくの絵を見ていただければわかることも多いでしょう。

でも、青春時代のあの数々の失恋体験が無かったら、

はたしてぼくは「ゴッホ」になっていたでしょうか。

ぜひ、新たな「ゴッホ」を見つけにまたお出かけください。

そしてその時、皆さんともっと色んなお話が出来たら良いですね。

では今日はここまで…

ヴァン・ゴッホの失恋モノローグ

<http://p.booklog.jp/book/78264>

著者：角間貴生

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yumelife/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78264>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78264>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ